

## 文教大学大学院の特徴

- 1. 国際協力の専門家を養成**  
「デベロップメント・スタディーズ」は、国際協力の専門家をを目指す人や民間での国際交流業務に関心のある人に研究・教育の場を提供する。先進国から途上国への支援というイメージから、広く発展のあり方を問う。
- 2. 地域プランナーを養成**  
「市民社会と地域デザイン」では、市民社会やガバナンスのあり方、地域のデザインをテーマに、日本の地域社会を地球市民の視点から捉えている。政策立案能力が求められる地方公務員、地域プランナーなどを養成。
- 3. 観光産業の担い手を養成**  
「ツーリズム」では、アウトバウンド観光における多様化、インバウンド観光での量的拡大に対応した観光経営やサービス、地域の景観、文化、人々との生活との交流演出をテーマとする。観光産業の担い手養成の場。



インドネシア・バンリ県の村でゼミ合宿のアグロフォレストリー実践時に同県知事と

3つの研究領域を掲げ  
4つの側面から  
国際協力にアプローチ

# 文教大学大学院

国際学研究科

文教大学国際学研究科が考える「国際協力」とは狭義の援助ではなく、国や地域を越えて、より良い市民生活を構築していくための基本的姿勢を意味する。同研究科が目指すのは、グローバルな視点から考えローカルな場で活動することのできる地球市民の養成だ。そのために「デベロップメント・スタディーズ」「市民社会と地域デザイン」「ツーリズム」の3領域を掲げ、「国際協力」「環境」「観光」「市民社会」あるいは「地域社会」の4つの側面から国際協力学にアプローチする。学生は互いにシンクロする3つの領域を横断的に学ぶことができる。

同研究科の特徴の一つは、教員と学生の距離の近さだ。多彩な専門領域の教授陣が多様な背景を持つ少人数の学生とともに、それぞれの専門的な研究を深めている。「アグロフォレストリー」という手法を用い、自然環境問題と、同時に経済問題も解決するプロジェクトに取り組んでいます」



黛陽子先生  
国際学研究科  
准教授

専門は環境共生と地域政策。バリ島をフィールドに研究活動とルーラルツーリズム作りを展開する。

と黛陽子准教授。黛准教授はインドネシア・バリ島で研究活動を展開し、また自らNGOの代表も務め、文教大学のゼミとリンクさせている。毎年ゼミ生は現場活動に参加し村人目線の生活を直に理解した上で、モノづくりや販売に参画。長年の経験から国際協力は「現地の人とともに考えることが何よりも大切」と訴える。修了生の進路は、国際協力の専門機関、コンサルタント、CSR・環境問題に熱心な民間企業などで、知識や経験を広く活かしている。

**私が目指すSDGs**

私の研究テーマはいくつものSDGsとかかわっています。中国の農家楽とかかわっています。中国の農村の貧困は自然環境を守りながら農村の貧困問題を解決することを期待しているため、特に目標1の「貧困をなくそう」は大いに関係がありますね。

## 学生さんに聞きました!

## “農家楽”を地域の発展につなげたい

私は日本のグリーンツーリズムと中国の農家楽(のうからく:グリーンツーリズムとはほぼ同じ意味)を対象に、ルーラルツーリズムにおける体験プログラムの研究をしています。中国では、貧困対策のために農家楽を推進し、私の故郷の広州でも取り組む農村が増えています。しかし農家楽の内容は発展段階で、特産物づくりや体験プログラムの種類が少なく、お客さんが満足できてはいけません。ここで日本のグリーンツーリズムを勉強して、中国の良さを活かした新しい体験プログラムを農家楽に取り入れていきたいと考えています。

日本には収穫した果物でジャムをつかったりソバを打ったりする体験プログラムがありますね。面白いと思ったのは「スイカ割り」です。農家楽の利用者が満足できて、もっとお金を落とし、農民の収入が増え、地域も発展するとういなと思います。

黎銘欣さん  
国際学研究科 1年



取得可能な学位：修士  
定員：5人(入学定員5人、収容定員10人)  
学費：約99万円(入学金含む)  
開講形態：昼  
所在地：〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100  
Tel: 0467-54-4300  
HP: <https://www.bunkyo.ac.jp/>



## 大学院概要

3領域を横断的に学び、多面的な視野で国際協力にアプローチ

フィールドスタディーを奨励、研究費などの支援も充実

学生1人を教員3人がサポート 手厚い指導体制

## ここがポイント

### 実践担う地球市民を養成

文教大学大学院国際学研究所が考える「国際協力」とは、国や地域を越えグローバル化する現代において、よりよい市民社会を構築・運営すること。そこで、「グローバルな視点から考え、ローカルな場における活動・実践を担える“地球市民”の養成」という理念の下、次の三つの研究領域から「国際学」にアプローチしている。

「ディベロップメント・スタディーズ」は、国際協力や国際交流に関連した事業の専門家養成のための研究・教育の場。先進国から開発途上国への外発的支援のイメージを取り払い、広く発展の在り方を問う研究に取り組んでいる。

「市民社会と地域デザイン」は、政策立案能力を求められる地方公務員、地域プランナー、非営利組織な

どの専門家養成の場。市民社会やガバナンスの在り方、地域デザインを研究テーマに、日本の地域社会を地球市民の視点から捉えることを目指している。

「ツーリズム（観光）」は、アウトバウンド観光の多様化・インバウンド観光の量的拡大に対応した観光経営やサービス、地域の景観、文化、人々の生活との交流演出などを研究テーマに、より高い専門知識を持った観光産業の担い手の養成を目的としている。



国連の協力のもとで行う授業もある

## 教授陣の声

開発援助のような外発的な力には、地域社会がもともと持っていた文化や伝統的な知恵、紛争解決の仕組みなどを壊してしまう側面があります。私が担当している「開発人類学概論」では、そうした地域側の視点を取り入れ、物事を多面的にとらえながら、開発の在り方を学んでいます。

国際研究学科の特徴は、三つの研究領域を横断的に学べること。海外でのフィールド調査には研究費支給などの支援もあります。少人数制のため学生と教員の距離が近いのも特徴です。



地域の視点を重視した多面的な研究を

渡邊 暁子 先生  
Watanabe Akiko  
国際学研究所 准教授

学びたいことを学べる環境が魅力

藤倉 有沙 さん  
Fujikura Arisa  
国際学研究所 修士課程 1年



テーマを決めるところですが、興味を持っているのは民主主義とメディアの関係。伝えられた情報によって市民社会がどう変わっていくのか、日本の市民社会の形成について、研究できたらと考えています。



国連大学を訪問



# 文教大学大学院

国際学研究所



## 大学院情報

取得可能な学位： 所在地：〒253-8550  
修士（国際学） 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100  
定員：5人 Tel: 0467-54-4300  
(募集人数5人、収容定員10人)  
学費：98万円  
奨学金：あり



## 在学生に聞きました

国際関係に興味を持ったのは、小学生の頃。北朝鮮が核ミサイルを発射したときに、なぜ国と国が仲良くできないのか、なぜ関係がこんなに複雑なのか、子供心に知りたいと思うようになったのがきっかけです。最初は短大に進学しましたが、国際関係や国際政治を学びたくて、短大卒業後に改めて文教大学国際学部の3年次に編入。2年間は学び足りないと感じ、大学院に進みました。文教大学のいいところは、学生と先生の距離が近いこと。興味があればほかの先生のゼミにも参加できるなど、学びたいことを学べる環境です。課題が見つかる、学生も先生も「それはいいね」と認めて行動に移す機動力もあります。私は現在、修士課程1年で、これから修士論文の

在学生の声

紛争後の国づくりを研究



国際学研究科  
国際学専攻 修士課程2年

平戸 拓也 さん  
Hirado Takuya

**紛**争を経て独立した国家の国づくりに興味があり、文教大学の学部の卒論で東ティモールを取り上げましたが、もっと深く掘り下げたいと思い、当大学院に進みました。東ティモールのような独立後まだ15年ほどの国にはどんな課題があるのか、それらにどのように対処しているのか、そういった点を学ぶことで、これからの国際社会に何らかのメッセージを出せるのではないかと考えています。まずは現地を見ようと、今年、初めて東ティモールを訪ね、紛争の傷跡や出身地による差別が残っている実態を目の当たりにしました。センシティブな内容を扱う調査でしたが、そのノウハウは先生方とのピアレビューでしっかり身に付けました。

当大学院は院生に対するサポート体制が充実しており、そうしたところも気に入っています。将来はこの大学院で学んだことを生かせる仕事ができればと考えています。



School Data

〒253-8550  
神奈川県茅ヶ崎市行谷1100  
TEL 0467-53-2111(代)  
Email gs-kokusai-shonan.bunkyo.ac.jp



専任講師  
の声

Q. 授業や学生の様子は?

私が担当する「開発人類学特論」では、開発途上国で「開発される側」に置かれてきた人々に焦点を当て、先進国側が陥りがちな開発観のバイアスやさまざまな開発の在り方、人々の多様な価値観について学びます。「フィールド調査法演習」では、リサーチの倫理的な部分に配慮しつつ、フィールド調査の企画・実施・執筆を行います。学生からは研究のための研究ではなく、社会貢献のために実践型の研究をしたいという気持ちがかえります。院生はさまざまな分野の先生方から指導を受けるので、物事を多面的に見る視点が養えるのではないのでしょうか。

Q. 修了後の進路は?

外務省専門調査員や青年海外協力隊員として途上国の支援に従事するケース、修士論文のテーマを生かして福祉、行政、教育関連の公務員になったり、一般企業に就職したりするケースがあります。また、ここでの研究をより進化させるため、他大学院の博士課程に進学する人もいます。

国際学研究科  
渡邊 暁子 専任講師  
Watanabe Akiko



文化人類学と東南アジア地域研究が専門。移民と労働、国民国家について研究



POINT

- 3領域を横断的に学べる
- フィールドスタディーを奨励
- 学生1人を教員3人がサポート

大学・大学院情報

- 神奈川県茅ヶ崎市
- 修士(国際学)
- 98万円(入学金含む)
- 5人(入学定員5人、収容定員10人)
- あり

文教大学大学院  
国際学研究科



社会に貢献する “地球市民” を育成

文教大学大学院国際学研究科は「グローバルな視点から考え、ローカルな場における活動・実践を行う」地球市民の「養成」の理念の下、次の3つの研究領域を掲げている。

「デイベロップメント・スタディーズ」は、国際協力や国際交流に関連した業務に関心のある専門家養成のための研究・教育の場。先進国・開発途上国という従来型の枠組みを取り払い、広く発展の在り方を問う研究を目指している。

「市民社会と地域デザイン研究」は、政策立案能力が求められる地方公務員や地域プランナー、NPOなどの専門家養成のための場。変動する日本の地域社会を地球市民の視点から捉えようとするもので、市民社会やガバナンスの在り方、地域デザインをテーマとする。「ツーリズム(観光)研究」は、専門知識を持った観光産業の担い手養成の場で、アウトバウンド観光の多様化、インバウンド観光での量的拡大に対応した観光経営やサービス、地域の景観、文化、人々の生活との交流演出などをテーマとする。学生は互いにシンクロするこれら3つの領域を横断的に学ぶことができる。

地元・茅ヶ崎市との連携事業として、市役所の職員向け研修と大学院の授業を合同で行っており、職員と学生の双方から意見が聞けると好評だ。少人数制のため教員との距離が近く、学生はアットホームな雰囲気の中で研究に取り組んでいる。

イチオシ

学びのサポート体制



学位論文の執筆に当たっては、主指導教員1人と副指導教員2人が1人の院生を指導する他、年2回の中間報告会では全教員から助言を受けられる。国内外でのフィールドスタディーに調査費用が支給されるなど、サポート体制が充実している。